

宣教師の足跡

竹 中 正 夫

協力者として

同志社は、創立当初からミッション・スクールではなく、キリスト教主義学校として建てられた。両者ともに、キリスト教の精神を徳育の基本とする点において軌を一にし、宣教師を迎えて外国のミッション・ボードと協力関係をもつ点において変りはない。しかし、根本的な相異としてつぎの二点をあげることが出来る。ミッション・スクールの場合は、宣教師を派遣した外国の伝道団体が経営する学校であり、日本人教師や理事者がそこにいるとしても、それは外国宣教師のヘルパーであった。わが国における多くのミッション・スクールの院長の多くは、ごく最近まで宣教師であった。同志社では、新島襄がいち貫して日本人を責任者として立てており、宣教師が社長や総長になったことはなかった。幕末から明治にかけ

て存在していた私学の名前をみると、大体つぎの四種類に分けられる。一つは、松下村塾や慶応義塾のように、塾とよんだもので、優れた教師の周囲に学生たちが集ったもの。第二のものは、伝習館や弐習館などにみられるような藩の設けた藩校。さらに明治学院や関西学院などのように外国の宣教師によってたてられたミッション・スクール。そして、同志社、のように、社というのは同志的な仲間をあらわすもので、学校の名前としては、異色であった。似たような例として、明治六年に結成された同人社や明六社、翌年の立志社などがあり、いずれも新しい時代を迎えて、自由と人間性にめざめた人々の同志的結合をあらわしていた。

キリスト教主義学校とミッション・スクールの相異となる今一つの要素としてあげられることは、ミッション・スクールは、キリスト教の伝道を目的としたのに対し、キリスト教主義学校、キリスト

教主義大学は、キリスト教に根ざした人格教育をすることを目的とした。宣教師たちの中には、デヴィスのように、伝道精神が旺盛であった。同志社が、国家主義の抬頭にもなつて徴兵猶予の特権を得るため、キリスト教の一項を削除したことがあった。そのとき、アメリカン・ボードの宣教師たちは同志社から総辞職をし、福音学館という学校を創設し、デヴィスを校長としたことがあった。明治三十年のことである。このような対立があったにもかかわらず、同志社一〇〇年の歴史を省みるならば、同志社で働いた宣教師たちは、新島の志を理解して同志として、つねに協力をなしてきたということが出来る。右の出来事について、かつて同志社中学で教え、また戦後に法人同志社の理事をつとめたダーリー・ダウズは、「これは実に忌むべき事件であり、ボードがかのような手段に訴えたことは今さらながら遺憾に思う」とのべている。

はじめて京都に

明治のはじめに、外国人たちは許可なくして開港地以外に滞在することを禁じられていた。明治五年、たまたま京都で博覧会が開かれたとき、外人には一〇〇日間の滞在許可が出た。アメリカン・ボードの宣教師のオラメル・ギューリックと宣教師ペリーは、その機会を利用して京都にやつて来た。その間、英語を教えることになつた。ところがその契約の中に、キリスト教を教えないという条項があった。ギューリックはこれに賛成しなかったので、京都から退去を命ぜられている。その上、彼の宿舎をあつせんした官憲も処罰され

ている。いかに外人に対する規制が厳しかったかがうかがわれる。

しかし、この出来事は思いもかけない副産物を生んだ。当時京都府顧問をしていた山本覚馬が宣教師たちと相識する仲となり、キリスト教の理解者となつたのである。山本は長く眼病を患い、眼の不自由な会津藩士であった。維新の変乱にあつて投獄され、リユーマチを病み歩行も思うにまかせなかった。しかし、保守的な京都にあつて、時代の進展を展望していた進取の士であつた。おそらく、彼が宣教師たちと接近するきっかけとなつたのは、宣教師ペリーの訪問であつたと思う。ペリーはさきの博覧会のおり、京都医師会で講演をしている。ペリーの専門は眼科であり、眼を患つていた山本はとりわけ関心を示したものと思われる。宣教師たちは、当時のキリスト教入門書として読まれていたマーチンの「天道溯源」^①の中国語訳を山本に進呈した。山本はこれを読んで深い感銘を覚え、さらに四十五部ほど注文して周囲のものたちに読むように配布している。^②

山本覚馬は、初代京都府会議長や商工会議所の会頭をつとめた有力者であつた。三年後、新島が山本を訪ね、キリスト教主義学校建設の訴えをしたとき、すでに山本の心の中にはキリスト教についての理解が形成されていたのである。

明治八年結社・同志社の設立社員は、新島と山本の二人であつた。彼は、御所の北側、相国寺南門前町の通称薩摩屋敷といわれていた五、八〇五坪ばかりの土地を同志社に譲渡し、今日の同志社キャンパスの基礎を築いた。その場所は、山本が盲目となり、薩軍に捕えられ幽閉されていた思い出の場所であつた。明治九年一月三日、新島は、宣教師デヴィスの司式によって、山本の妹八重子と結



D. C. グリーン

婚をなしているのをみても、新島と山本、デヴィスの緊密な関係がうかがわれる。

最初の人

明治七年末、苦節十年の海外の研鑽を了えて新島襄は帰国した。横浜でかれを迎えたものはごく少数であった。その中に、アメリカン・ボードの宣教師、D・C・グリーンがいた。グリーンは、一八四三年マサチューセッツ州に生れた。父はアメリカン・ボードの職員であり、母方の父はボードの役員をつとめていた。シカゴ神学校に学び、デヴィスと同級であった。アンドーバー神学校で学んだのち、一八六九年、アメリカン・ボードの最初の宣教師として来日していた。

新島もヴェルモント州のラットランドで開かれた第六十五回アメリカン・ボードの総会で、キリスト教主義大学設立のアップールをなし、ボードの準会員 (Corresponding Member) として、宣教師

とはほとんど同じ資格を与えられて帰国した。

アメリカン・ボードとは略称であって、正式の名は米国外国伝道委員会 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) といった。創立は一八一〇年である。一八〇六年、マサチューセッツ州のウィリアムズ大学の数名の学生たちが雷雨をのがれてほし草のかげで祈りをしていたとき、期せずして、世界の各地に行つて福音を宣教するという使命感にみたまされた。その青年たちを支援するためにアメリカン・ボードが発足し、ニューイングランドの有力な州知事や、イエール大学などの学長や牧師たちが設立役員となった。彼らは、ニューイングランドの質実剛健の気風をもち、カルヴァンの流れをくんで神学的展開をしたジョン・ナルタン・エドワードの影響を受け、神をおそれ、すべての人に及ぶ神の愛の証人となろうとしていた。

アメリカン・ボードは、グリーンを日本に送るにあたって、こう述べている。

「グリーン博士や後に彼の同労者となる宣教師の基本的目的とは、できうるかぎり速やかに、日本の教会を自主、自立、自治の形体にすることである。」

アメリカン・ボードがはじめから日本の教会と諸学校の自主性を尊重していたことがよくわかる。第二次世界大戦の中国の教会が三自運動として強調していることを明治のはじめに主張していることは興味深いことである。

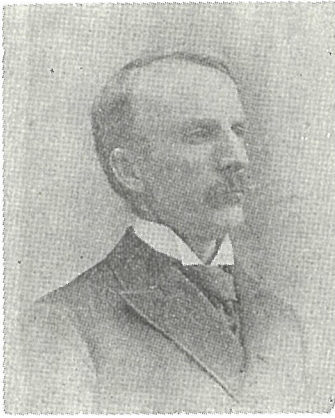
グリーンは、のちに梅花女学校を設立した沢山保羅や、聖書の翻訳にあたった松山高吉に感化を及ぼした。松山は、明治一六年から

同志社社員（今日の理事）をつとめている。グリーンは、一八八〇年から同志社で教鞭をとるようになった。彼の専門は神学であったが、彰栄館、図書館、チャペルなどの設計や監督を行った。以前の京都駅が解体された今日、これらの建物は京都最古の煉瓦建築となっている。

グリーンの長男エバーツはコロンビア大学の日本研究所長となり、次男ジェロームはボストン日本人協会の会長をつとめ、一九六〇年日本修好通商百年記念行事のとき、親子三人とも表彰されている。グリーンは大正二年葉山で没した。その墓は青山墓地にある。彼が晩年に愛好し、研究をしていた高野長英の墓の側にあることも、偶然以上のものを覚える。^⑤

ゴールドンのこと

日本に帰った新島襄は、安中でゆっくり休む暇もなく大阪に赴



M. L. ゴールドン

き、アメリカン・ボードの宣教師 M・L・ゴールドンの家に仮遇する。ゴールドンも、デヴィスと同じく南北戦争に参加し、そののち、アンドーバー神学校に学び、さらに、一八七〇年よりニューヨークで医学を学び、一八七二年には医学士の資格をとり、アメリカン・ボードの宣教師として来日した。新島の招きに応じて同志社に來り、説教と牧会を講じた。彼は、詩才にもとみ、日本の詩歌の翻訳をしたり、「琵琶湖をのぞみて」という英詩をつくり当時の学生たちが吟唱するところとなった。また、「外人もまじえて加茂の涼みかな」というような発句を新聞に寄せたこともある。

自宅を解放して中京から下京にかけての京都の町の人々に伝道をなし、その影響によって生れたのが現在の京都教会で、はじめは、富小路四条を少し下がったところにあった。

初期の会員のなかには、元市長、高山義三の父、中村栄助や山本宣治の両親、亀松多年の名がみえる。中村は山本寛馬の指導を受け、少壮実業家として府會議員もつとめ、明治一六年から死ぬまで、五十数年にわたって、同志社の理事をつとめ、再三総長事務取扱となった。山宣の父は、当時京極でワンプライス・ショップというアクセサリーの店を経営していた。^⑥

両腕の人々

新島の両腕となつて初期の同志社に貢献したのが、ジェローム・デヴィスとドワイト・W・ラーネッドであった。二人のことについては、それぞれ詳伝が出ているので、ここではエピソードの二、三を記すにとどめたい。

デヴィスもラーネッドも新イングランドの清教徒たちの伝統をうけついでいたが、デヴィスは二十三歳にして南北戦争に参加し、弱冠中佐に抜擢された剛毅活達（ごうぎかつたつ）の士であるのに対し、ラーネッドは規則正しい生活をなし、透徹した理性をもって読書と著述に励んだ学究の徒であった。デヴィスは、一九〇一年オベリンで六十二歳で死んだが、「我が生涯は私が遺言なり」という言葉をのこした。ラーネッドは、九十五歳でカルフォニアで死んだ。若王子にある墓石には、「Learn to Live and Live to Learn」と刻まれている。前者は波瀾万丈の生涯をあらわし、後者は整然淡々の学風をあらわしている。

デヴィスの息子メルルは、北米のYMCAの幹事をつとめ、いくつかの著述を残し、ジェロームはイエール大学で社会倫理学を講じていたが、教授にはならず、晩年は平和運動に打ちこんで、毎年のようにソ連にゼミ旅行を引率して東西の交流につとめていた。目下、メリーランドのクエーカーの老人ホームにいる。彼も、学究の人というよりも情熱の人である。

ラーネッドは、一八七二年イエール大学から哲学博士の学位を得て、ミズリー州のキダー・カレッジで教鞭をとっていた。そのとき、同僚のフロレンス・レハード嬢と親しくなり、駈落ち結婚をしたというエピソードがある。ラーネッドも情熱の人であったのである。今日、イエール大学のあるニューヘーブンに行くと、入学式などのある講堂をウーズレー・ホールというし、目ぬき通りにホイットニー通りというのがある。又、イエールの古いキャンパスの中央部にはドワイト・ホールという宗教センターがある。父子二代にわ

たってイエールの学長をつとめたドワイトを記念したものである。ラーネッドの名前、ドワイト・ホイットニーという言葉はそれらからとられているし、ウーズレーはラーネッドの親族である。考えてみると、初期の宣教師のなかに、デフォレスト、アダムス、ブラウン、ゲインズ、スタンフォードなど、イエール大学の出身者が少なくなかったのは興味深いことである。これは、外国伝道に関心をもったのは、ユニテリアン系が中心を占めたハーバード大学の人たちではなく、ジョン・エドワードの影響をうけた福音主義の信仰に立った人々で、イエール大学、アーモスト大学、アンドーバー神学校などで学んだ人々が多かったのである。

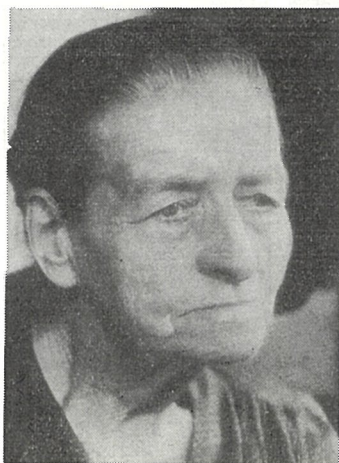
デントンさん

一八八八年、ゴールドンは休暇で米国に赴いた。そのとき、カルフォニアで学校の教師をしていたメリー・フロレンス・デントンに出あった。彼女は清教徒の流れをくむ家庭に育ち、米大陸を横断して加州に渡った家庭に育った。ゴールドンは、京都の同志社に設立された女学校のことを話し、新島を援けて女子教育に献身して欲しいと懇願した。デントンは心動かされ、家族の反対をおし切って日本にやって来た。ときに二十九歳であった。同志社の女子部の中心をなしている栄光館は、一九三二年に実業家ファウラーの寄付が基となって建てられた。ファウラーはデントンの若き日の婚約者であった。だから、栄光館のことを、別名「ファウラー・チャペル」とよんでいるのである。ちなみに、栄光館の中央にあるパイプオルガンは、一九四一年に、五十二年の長きにわたって同志社の女子教育

に尽したデントンを記念して、太平洋婦人伝道会から贈呈されたものである。

戦争の波が周囲におし寄せてきて、米国人のほとんどが日本から引き揚げていったときでも、デントンは、デントして同志社を去らなかつた。グルー大使から勧告があつても、「私は帰りますせん」といい、最後の船に乗るようにと神戸の領事がすすめるのに対して、「もし帰国するならば、平和回復第一船に乗って、米国の同胞に、いかに日本人が誠意をもつて私を遇したかを話してやりたい」といつて応じなかつた。

デントンは質素な客室を設けて、京都に来る外人を心よくもてなした。バイオリンのエルマン、飛行家のリンドバーク、英国のマクドナルド卿、それにニューヨークの富豪ジエームズなどがその中にいた。彼らは、デントンを通して京都を知り、京都を通して日本を知るようになつた。戦乱がおさまり、日米の新しい交流がはじまろ



M. F. デントン

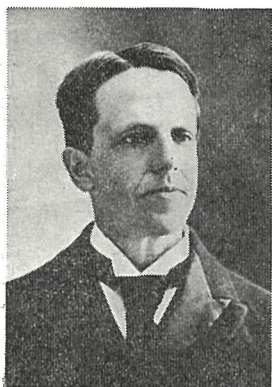
うとした一九四七年一月二十四日、デントンは同志社の構内において八十八歳の生涯を終え、文字通り同志の骨となつた。

ケリー三代

同志社に三代にわたつて貢献した異色の宣教師一家がある。祖父オーテス・ケリー（一八五〇—一九三〇）も、息子フランク（一八五〇—一九七三）も、三代目のオーテスもみな新島の学んだアモスト大学で学び、アメリカン・ボードの宣教師として来日し、同志社のためのそれぞれ顕著な貢献をなしてきている。祖父のオーテスは、はじめ岡山県の伝道にあたり、一八七二年から一九一八年引退するまで同志社の神学部で教鞭をとつた。彼は、「急がば廻れ」ということばを大切にし、コツコツと資料をあつめて、二巻、七八二頁にわたる大著、日本教会史を出版した。これは、一九〇八年にアンドーバー神学校でなした講演を基としたものである。この書物は、現在でも最も綿密にして信頼すべき日本教会史として評価されている。今秋、孫のオーテスによって復刻版が出版されることになつた。

フランク・ケリーは、大学時代からフットボールの選手をつとめたスポーツマンで、何事も公明正大、寛容のなかにも筋を通す人徳をもつていた。祖父のオーテスも平和主義者であつたが、フランクもその流れをくみ、昭和一二年組合教会の総会が岡山で開かれたとき、「皇軍將兵に対する感謝の決議」をなすため全員が起立したときでも、一人静かに座つて立たなかつたというエピソードが残っている。

戦争中は、フィリピンにあつて、はじめはミンダナオ島で日本



O. ケーリ (初代)



F. ケーリ



O. ケーリ

人の世話をなし、後には、日本軍によって捕えられ、収容所に入れられた。一〇〇キロもあった巨体も、健康を害してその半分ぐらいに痩せ細ったりしたが、収容されていた人々の世話をなし、弱い人々をたすけていた。

三代目のオーテスは父がフィリップンで収容されていたころ、ハワイの捕虜収容所長をしていた。戦後アーモスト大学の派遣により同志社に来て、新制大学の制度づくりに尽力し、アーモスト館長として、日米の文化交流に貢献している。フランクは、戦後、阪神間の立花に開拓伝道をす

るかたわら、同志社や

神戸女学院の理事をつとめ、学校教育に尽している。

このほか、明治二十年に設立された同志社病院の院長となった宣教医ベリーや、看病婦学校で働いたリンダ・リチャーズや、サラ・バックレイなどの働きも銘記すべきものがある。

あとにつづく人々

こうした宣教師たちの精神は、のちの後継者たちによって受け継がれていった。中学で教え、のちに内外協力会の幹事をつとめ、法人同志社の理事として力を尽したダリー・ダウンス（一八九六—一九六九）や、旧約学を担当し、オペリン大学から招聘されても、「わが使命は同志社にあり」といつて同志社に踏みとどまったE・S・カーブ（一八七九—一九六〇）や、福音同邦教会の宣教師として一九〇九年から宗教教育を講じたシャイベリーなどの人々を忘れることが出来ない。

おわりに、戦後の復興期に貢献したグラント、ヒバード、クラップ、デッソー、ヤング、サーバー、ダウプ、ウード、ロイド、コーラー、フカダ、ラッシー、タッカーなどの人々の名をあげると共に、その時代に同志社で働いたアリス・E・グインが愛唱した詩の一節をかかげよう。これは、インドの詩人タゴールの作品で、一〇〇年にわたって同志社の歴史に生きた宣教師たちの心情をあらわしていると思うからである。

*

*

「あなたは知らざりし人を友とならしめ
わが家ならざる所に座を与え
遠きものを近くし、未知の人をも
兄弟とならしめ給いました。」

さりながらこの住みなれし宿を
立ち去る時、

私のころは不安です。

新しいものの中に古いものがあり

あなたもそこに居給つことを忘れがちです。

生れる時も死ぬ時も

この世でもあの世でも

あなたが導き給ういつこにても

喜びの絆^{きずな}もて、未知のものを

私の心につなぎとめるもの

それはとこしえに変らぬあなたです

私の生命の唯一の友なるあなたです。

あなたを知るとき、

国のへだては消えうせ

開かぬ扉はなくなるのです。」^⑧

(大学神学部教授・宗教社会学)

(注)

① 本書の原名は、“Evidences of Christianity”

② M. L. Gordon, Thirty Eventful Years.

The Story of the American Board's Mission in Japan,
1859-1899, p. 21~22.

③ 従来から、新島が帰国した際、アメリカン・ボードの「通信員」という役割をもっていたように記されている。これは、“Corresponding Member”を「通信員」と訳した間違いによるものである。

“Corresponding Member”とは、正会員ではないが、それに相ふさわしいものという意味で、「準会員」と訳するのがよいと思う。ある人は、「宣教師補」としているが、これも正確なものと言えない。

④ ダーリー・ダウンズ「初期アメリカン・ボードの宣教師たち」、同志社時報三十四号、二〇頁。

⑤ グリーンのことについては、校友、手塚竜磨氏にいろいろお教えをいただいた。また、墓については、小川鼎三「宣教師グリーンとの奇縁」、岩波『図書』、一九七二年七月号参照。

⑥ 山本宣治の両親については、佐々木敏二、山本宣治(上)、一九七四、参照。

⑦ J. Merle Davis, Davis, Soldier Missionary, 1912.

⑧ アリス・E・グイン、私の生涯に沿って、同志社時報一八号、七〇頁。

理化学館の四半世紀

—— 破防法から科学史学会まで ——

山 田 忠 男



「ワッショイ、ワッショイノ」四列縦隊になって、学生諸君が長崎の蛇踊りよろしくキャンパスを……。お祭りではない。先頭には白髪の老教授も並んでいる。隊列の中には教職員も多い。これが破壊活動防止法案に反対する、恐らくは

戦後の同志社で行われた最も整然としたデモだったろう。

それを私は、理化学館二階の正面、バルコン風に軽く突き出した窓から見ていた。ここが当時の特等席である。既に卒業して某新聞社に入っていた卒業生が、たまたま私を訪ねてきていたので、一緒にこの場を占拠していた次第。デモは、「何とか反対ノ」だとか「コロセノ」などという物騒な掛け声を出さないし（ハンド・マイクがなかった）、石器、木器、金属器なども持たない。紫の大きな旗を先頭に赤旗が僅か混じる程度——ある意味では牧歌的

な時代でもあった。

西半分だけ出来ていた明徳館で開かれた全学教授会では、破防法に反対する声明を出していたし、円山では三大学が主催して反対の市民大会まで開いた。そして私は、混成のオーケストラを率いて、その音楽堂で三大学の学歌を演奏したりしたもので、四半世紀の差とはいえ、当時を思うとまことにうたえた感慨無量なのである。

何しろ学園内の建物は、いずれも戦前からの風雪を物語っていた。明徳館の東には、バラックと呼ばれた東西に長い平屋の半分がまだ残っていたし、至誠館も弘風館も木造の二階建である。更に、今の雑然として巨大なる生協とは違って、清潔で可愛らしい学内食堂が神学館の西北にあり、昭和も一桁時代からこの二階の合奏練習場へ私もよく京大から応援に来たので、戦後の同志社へ職を奉じた頃、この二階でよく開かれた学生諸君との集会は特に懐かしい。

昭和二十二年の夏、いよいよ同志社へ移る決心で湯浅総長に会いにきたとき、本部はアーモスト館にあった。その二階の、まさにコ

「ジー・ルームでコーヒの接待をうけながら、総長とトルーマンを論じ、アインシュタインを語って、荒涼たる京大のそれと比べ本心に心あたたまる思いをしたものである。」

そのとき、有終館では児玉教授に拝肩。翌年の春からこの一階にあった教授室に住むこととなり、二階で講義をして、一階の北側にあった小教室ではディスカッションなることを行った。北垣学生部長など、この頃から俊英のはまれを發揮したものである。時折りは

この建物の屋根から地下室までを探険して、新夢の私は伝統と歴史の香りとばかりを楽しんだ。しかし間もなく本部がアーモストからここへ移るというので、今度は致遠館の二階住い。この建物も悪くはなかったが、村役場然たる西側の教授室は頂けなかった。机の下に大きなヒキガエルを隠して飼っていたの

に、いつの間にかこれが逃亡したことを打ち明けたのは、地学を担当していた西原教授だけである。間もなく彼の入れ知恵によって、出来たての有隣館の階段下を間仕切りした小部屋を作って貰う。ここでは顕微鏡を覗くことも出来るようになった。だから、ここでの実験風景なる写真が、創立七十五年の記念グラフを飾っている。

昭和二十六年の春からは、工学部へ入籍す



理化学館内部の階段

ることになる。そして私の理化学館時代が始まった。この二階の乾の方角に当る昔の標本室跡へ、天野、西原両友と共に移り住む。螢光灯をつけたり、イオン交換で蒸留水を作ったりするようになると、珍らしいというのが他学部から見に來たりした程なのである。

当時の堀場学部長が配慮して、学生実験室に、グラントの東北隅にあった中学の美術教室の跡を貰った。今は博遠館のためその遺跡もないが、ここは三十坪程の平家で、南側にはイモリやカエルのために池を掘り、更にその周囲は芝生や花壇で美しく飾りたてたものである。理化学館とこの実験室の間を、毎日何回となく往来するので、その途中にある角力部の土俵で選手たちの精勵振りを観戦し、彼らと仲よしになった。私たちの応援がきいたのか、角力部はその頃に全国制覇を遂げた筈である。そして寧靜館の建築前、この実験室をたたんで理化学館二階へと転宅縮小することになったとき、私たちでは四人がかりでフウフウいった大きな実験机を、フンドシ姿の選手諸君が一人で一つ宛を背負って運んでくれた。

理化学館は古いとはいえ、何といってもサ



波理須理科学学校開校式当日（明治24年）

イエンス・ホール。化学実験室など、いずれも創設時代のものだ。二階の床がいささか不安定だから、化学天秤を使うのには困ったが、下からつき上げとはいかなくてもレンガ壁に直接くっつけた台を作ってその上で測ることにより、一階へ一々おりて測る不自由も何と

かしのげた。ただし、床が床だから、近代的な仕事をするにはどうしても扶桑館の方を中心にせざるを得ない。

その代り、この建物には八十五年の歩みによって醸し出される個性がある。当時は私の部屋から相国寺の竹藪が見わたせし、また日暮れには入相の鐘も響いてきた。天井が高いから、実験室の壁面には山本宣治の行なった世界で最初の性行動調査とキンゼーのそれとを比較した図表をかけたなり、かねて一度は描きたいと思っていた理化学館をその西南から望む風景を、中学に来ていた長男の絵具をかりて水彩画に仕上げたもので飾ったりしている。その頃、田畑大学長が私の部屋を訪ねてきて、同志社一の教授室だとさえ称えた。天井の飾りについていたランプ吊りの金具が、私たちが入る際に電灯をつけるため取りはずされたので、これをドアの戸叩きにしている話は、他にも書いた。これは今も健全で出入りの度に床しい重厚な音をたてている。ただ、この建物の内部には至るところにあったランプ吊りが、改造を加える際に必ずどこかへ廃棄処分されると

見え、今では私のところの戸叩きも重要文化財になってしまった。

何でもそうなのだが、大きいことがいいこととはいえないように、古いことも必ずしもいいとはいえない。西洋の音楽——といって、たかだか三百年程の間のものでも、その古いものがバロックと称して大いに流行しているが、数あるバロックの中から、ほんものを見つけ出すことが大切なのである。そしてそれは、いわゆる文化財についても同様であろう。何でも古ければいいとはゆかない。

同じことが同志社の建物群についてもいえる。今は明徳館となつて跡方もなくなった前述のバラックなど、かつてここで学んだり講義をした人たちにとっては特別な懐しさもあるうが、なくなつて惜しいというようなしなものではなかった。私もここで講義をした一人なのだが、思い出はあるにしても惜しいとも思わない。

しかし新しいことはいいことかという、これも問題であらう。現にそのバラックの生れ変わりともいえる明徳館は、この四半世紀の間に色々なことで有名になったかも知れな

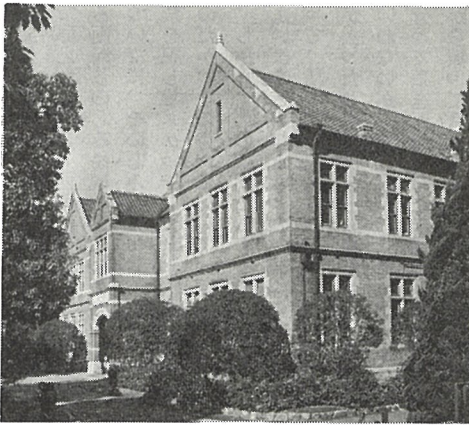
い。しかし建築の方からいって誇るべきものであろうか？ 何しろ、屋上屋を重ねたり、教室の容積だけを考えざるを得ない状況もあつたりはしたが、あの西北の隅にある塔は、口の悪いのがいふバベルのそれではないにしてもあまり美しいとは思えない。大きさ新しさ古さは別として、明徳館は北向えの小ぢんまりした理化学館に、建築として及ばぬであらう。

ただ、その理化学館も内部には手が加えられ過ぎた。二階の東南にあつた階段室をご存じの方があつたら、今の入りくんだ小部屋群と比べて頂きたい。現在、私たちが入っている西の方だつて同様。南北二つだけの部屋で南が教室、北は標本倉庫であつた時の方が、遙かに所を得ている。機能と形態——それは生物の個体についてばかりでなく、建築物についてもいえる。陣羽織を縫い直してチャンチャンコにすることは、機能でも形態でも必ずしも成功をもたらない。

もう一つ大切なことがある。それは近年になって、世界中で——特に日本でいわれ出した景観という問題である。建物は、建物だけが孤立に、個々に存在するのではない。その環境と相まって、機能としても重要な意味を

持つ。早い話、京都の名所である金閣、銀閣を考へて頂きたい。金閣寺では村上老師が周囲の土地を広く買い入れて、その景観を守るのに苦勞している。銀閣寺の方は民家が古くからその西側に連なるが、風致地区だとか緑地法などで守つてきた景観に、スレスレのところでマンションなる怪物が入つた。

同志社についても同様で、本年のように創立百年の喜びを迎えるに當つては、来るべき新しい世紀をどのような建築物の組合せで示



現在の理化学館

すかは、学園としての景観を考へる上で大切だと思ふ。レンガ建てや木造の重要文化財的な建物が、周囲から鉄とセメントの攻撃でその谷間に沈んでゆくことは、まさに残酷物語で、見てはいられない。

今年の六月には、科学史の島尾教授との関係から、日本科学史学会の年次会が同志社で開かれた。同志社百周年を記念して昨年春から予定されていたことだったが、国際学会は別として科学史学会としては最高の参加者を迎えることになつてしまつたのである。そしてシンポジウムには理科学校に因んだものを、特別講演には先日まで工学部に居られた桜田博士にと、同志社色に満ちた二日間であつたが、何よりも参加者を喜ばせたのは島尾教授のアイデアによる科学史蹟めぐりである。遺品庫でも特に科学を中心として、新島先生を始め、下村孝太郎、中瀬古六郎、加藤与五郎などといった大先輩の資料を展示して貰つた。新しい図書館にある下村・中瀬古岡コレクションは未整理のため公開できず、参会者を残念がらせたが、新島邸は多勢が出かけて大いに感激させたものである。

こうして緑はえる二日間を二百人の学者が

キャンパス内で暮して、一致して称えられたのが同志社風物。文化財や建築の方という景観のことである。もちろん、それは必ずしも百点に近いものではなかったろう。しかし、参加した方の属する全国の各大学その他には同志社のそれと肩を比べられるようなものがなかったということなのである。そして、その意味から、私たち同志社人も、お互いに心しなければなるまい。

有終館から致遠館をへて、理化学館へ移ったからの四半世紀。その間に、学生実験室として馴染んだグラウンド東北隅の茅屋は既にない。しばらく実験室的な役割りを果たした有隣館の階段下は、グラフィには姿を止めたもののこの夏の建設工事でケシ飛んだ。学園内には西は新町から東は幼稚園にいたるまで、いわゆる経済成長時代を中心に、大小数多くの新しい建物が出現した。また、女子部の栄光館のように、内部に大改装が加えられたものも少なくはない。その上、今出川では大学紛争の時に随分と荒れたものもあり、その痕跡は理化学館にも残っている。しかし私たちの研究室——二階西側はどうにか無事。私の部屋など、毎年のように夏に行われる大掃除や、

何年毎かに廻ってくる壁の塗りかえも辞退して、昔、レオナルド・ダ・ヴィンチが寺院の壁で称えたように、西南隅の高い天井から拡がる雨漏りのしみを鑑賞するのに余念がない。ついでに、そのしみの横には、レオナルドが禁を犯してスケッチした解剖図をかけてあるのだが、その意味に気付く人はなからう。

しかし、この部屋で独りを楽しむのも、いよいよあと半年となった。来年の三月末を以って、私は同志社を去るのである。そして私が去った跡も、壁のしみを玩味しろなどとはいわないが、理化学館のよさだけは皆さんに分って頂きたい。理化学館はレオナルドの頃から興ってきたルネッサンスの音楽なのだ。建築でいうと、バロックは十七世紀あたりからオーストリアやドイツで行われたカーブの多い、高度に装飾された建物を指すが、音楽のバロックは普通ルネッサンスからバッハやヘンデルまでを含む。そのバロックの語源をポルトガル語のバロッコ——不規則な形の真珠だと説明するが、クラインの辞典ではこれを誤りとして、フェデリゴ・バロッチの名から始まったと説く。そんならレオナルドとも近い。たとえ真珠であっても、理化学館は決

してイビツではない。昔ながらの天文台や窯業用の炉がなくなっているにしても……。

(大学工学部教授・生命の科学)

(七十一頁より)

に苦しみ、新しい国家、体制を模索していた憂国の士新島襄にとつて『連邦志略』は漢訳聖書や『ロビンソン・クルーソー』と同じく彼に大きな影響を及ぼした書であるということができよう。(大学文学部助教授・教育史特論)

注

① Ed. by Arthur S. Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* 1891, pp. 3-4

② *ibid.*

③ 小沢三郎著 幕末明治耶穌教史研究 一七九ページ 日本基督教団出版局 一九七三年

④ 佐渡谷重信著 アメリカ精神と近代日本 三ページ 弘文堂 昭和四十九年

⑤ 木村毅著 日米文学交流史の研究 二二四ページ 講談社 昭和三十五年

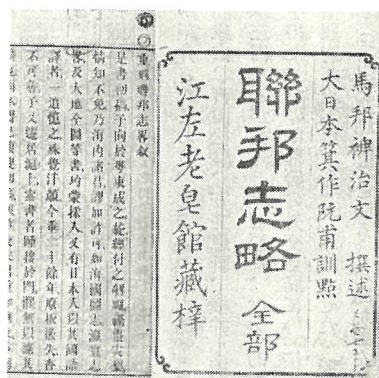
⑥ *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*, p. 4

⑦ *ibid.*, pp. 6-7

⑧ 木村毅著 前掲書 二二四―五ページ

新島先生が驚嘆した書

『連邦志略』



『連邦志略』

井上勝也

た。①と書いているが、彼が最大級に驚嘆し、密航の計画を具体化する上に大きな影響を受けたこの書が何という書名で、どのような内容をもったものであるかは、新島研究者にとつて大変興味のあることである。新島は一八八五年(明治一八年)、彼の自叙伝である“*My Younger Days*”の中で、この書のこゝを“a historical geography of the United States written by the Rev. Dr. Bridgman of the North China mission”と書いている。②

ディー夫妻の息子に“*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*”の編者である Arthur Sherburne Hardyは前述の「合衆国地図書」に次のような注釈をつけている。「こゝで『地図書』と呼ばれているものは、中

国は上海のブリッジマン博士によって書かれた合衆国史である。ブリッジマン博士の死後彼の未亡人が横浜のブラウン博士を訪れ、彼のもとに夫の合衆国史を数冊残していき、それがブラウン博士によって配布された。新島の手に入ったのは疑いなくこれら数冊の中の一冊であつたろう。③以上のことから新島が読んで感激した書は宣教師ブリッジマンが中国語訳したアメリカ合衆国の歴史と地理について書かれたものであることが判明するが、それでは新島が読んだ書は何という書名でどのような内容のものであるのか。

『幕末明治耶蘇教史研究』の著者である故小沢三郎氏は同書で宣教師ブリッジマンについて次のように解説している。「ブリッジマン(Elijah Coleman Bridgman, 1801~61)は中国名を裨治文といひ、アーモスト大学、アンドヴァー神学校を卒業した。アメリカン・ボードの一員として一八三〇年広東に渡り、上海で永眠するまで約三〇年間中国にあって宣教活動を行い、聖書を中国語に翻訳し、また真偽両岐論、美理哥合省国志略一八三八年、亜美理獨合衆国志略四六年、連邦志略六二年、耶蘇獨為救主論、永福之道、復活要旨、靈生

新島が一八六五年(慶応元年)十月、ハーディー夫妻に提出したいわゆる密航理由書の中で、「あるアメリカの牧師によって中国語で書かれた北アメリカ合衆国地図書」を「繰り返し読み、脳髓が頭からとろけ出る程驚い

註言等多数の著書がある」^③。ブリッジマンの著作の中で、新島の読んだという「アメリカ合衆国歴史地理」なる書は、上記のように三冊あるが、書名からして恐らく内容は三冊とも類似または同一のものであるとおもわれる。日米文化の比較研究をされている佐渡谷重信氏と木村毅氏は凡そ次のように書いている。『連邦志略』は一八五三年初めて中国から

我国に輸入された簡単なアメリカ史であるが、この中に「アメリカ独立宣言文」の要約が紹介されており、この『連邦志略』を佐久間象山、吉田松陰、安井息軒、横井小楠、橋本左内などがあらそって読み、世界的知識を得た。ついに幕府の外交当局にいた川路左衛門尉が正木篤に命じて和訳させた。題して『美理可総記和解』という。新島が読んだのは、「中国語で書かれた」ものであるから、和訳でないことは明らかであるが、私はこの『連邦志略』を探し出して調べれば、新島のいう「アメリカ合衆国歴史地理」がどの書であるか、また彼が驚嘆した理由が、或いは密航を計画した理由がより明確になるのではと思

い、本学人文科学研究所の杉井六郎教授にお尋ねしたら、同研究所のライブラリーにある

ことが判った。この書は前述の故小沢三郎氏の蔵書であったものを本学人文科学研究所が購入したものであることも判った。奇しき縁である。

さて、新島が密航理由書で「アメリカ合衆国地図書」について書いているところを見ると、「この書を繰り返し読み、脳髓が頭からとろけ出る程驚いた」と書いた後すぐに、大統領、建物、無月謝学校、貧民救護所、懲治監、機械工業等の具体的な語を挙げ、続いて次のように書いている。「我国の支配者は合衆国の大統領のようであらねばならないと思つた。そして私はつぶやいた。おゝ、日本の支配者よ、何故貴方は我々を大や猫のように抑えるのか。我々は日本人である。もし貴方が我々を統治するのなら、貴方は我々を貴方の子供のように愛さねばならない。その時から私はアメリカの知識を学びたくなつた。」と。そして別の個所で「我々は外国へ行き、貿易の仕方を会得し、外国の知識を学ばねばならない。しかし幕府の法律が私の考えを全て無視した。そして私は叫んだ。何故幕府は我々を自由にしないのか。何故我々を籠の鳥か袋の鼠のようにしておくのか。否、我々

はそのような野蛮な幕府を倒さねばならない。そして我々はアメリカ合衆国のように大統領を選出しなければならぬ。しかしああ、そのようなことは私の力の及ばぬところであらう。」と書いている。新島は密航理由書で独立宣言文について直接触れてはいないが、以上に引用した文章からも判るように、その影響がうかがえる。彼は当時の幕藩体制を批判し、人間の自由を保障するような政府をつくるにはアメリカの大統領制が望ましいとさえ言う。

本学人文科学研究所蔵の『連邦志略』は全二巻から成っており、表紙に馬邦神治文 撰述 大日本實作阮甫訓点 聯邦志略 全部 江左老臣館蔵梓 とあり、発行年は明記されていないが、最後ページの出版社の目録に元治甲子とあるので、新島が密航を企てた年に、我国で印刷出版されたものであることが判る。しかし既述のようにこの『連邦志略』は早くから我国に輸入されていたものであり、新島が読んだと推察されるものは、この元治元年版ではないが、内容は同じものであったであらう。『連邦志略』の内容は上巻が総論で、合衆国の地理(地図を含む)、歴史、政治、

教育、文化、言語、風俗、機械、貿易等、下巻は各論として各州の特色をかなり詳しく説いている。新島が読んで感激したと思われる個所を密航理由書から推察すると、目次に民脱英範、建国立政、設官分職、理刑規則、語言文字、学館書籍、教化説源、百工技芸、商賈貿易、善學述略といった項があり、民脱英範の項に独立宣言文の要約が載っている。木村毅氏によれば、「出論自爲『主治』之示、布告各国。試述其意云」という前置きに始まり、九行一八〇余字の次の個所である。

人事變更、反覆無常。今如有「一」等民、思脱他人之羈縻、而欲「自爲」立政、以循「人性」、以遵「神理」、與「夫」各國「相同」、則不可「不以」當「立」之故、布告於「人」。(蓋以人生受「造」、同得「一定」之理、「已」不得「棄」、人不得「奪」、乃自然「而然」、以保「生命」、及「自主」、自立者也。苟欲「全」此理、則當「立」政以從「民志」。設與「理」有「不合」、即宜「聽」民更正。況明哲之心、人皆有「之」。使「非」情勢太難、誰肯「輕」於「改革」。必且「隱忍」至「再」迫、忽「於」無「可」忽、而勢乃出「於」無「奈」耳。現英王「反」理虐「民」、屢行「不道」、凡諸「非法」、不「勝」指「屈」、姑列「數款」、以爲「共證」。

独立宣言文の最も有名な次の個所、We hold these Truths to be self-evident, that all Men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty, and the Pursuit of Happiness-That to secure these Rights, Governments are instituted among Men, deriving their just Powers from the Consent of the Governed, that whenever any Form of Government becomes destructive of these Ends, it is the Right of the People to alter or to abolish it and to institute new Government, laying its Foundation on such Principles, は漢文の()で示す個所に該当するが、英語の直訳ではなく、意識であり、英語のもつ強烈な印象はこの漢文からうかがえない。しかし、例えば建国立政の項では「一日君民同權、相商而治、如「英法」等国」是也。一日君非「世」及、惟民所「選」、權在「庶民」、君供「其職」、如「我」聯邦国」是也。夫我聯邦之政、法皆民立、權不「上操」。其法之「已」立者、則著爲「定例」上下同遵。」といったように、随所に民主主義的表現が見られる。

新島が密航理由書で挙げている大統領、建物、無月謝学校、貧民救護所、懲治監、機械工業等の具体的な説明がこの『連邦志略』に見い出されれば、彼が『連邦志略』を読んだことが立証されるので、四七丁(上巻)の漢文の中にそれらを模索してみた。すると大統領制については建国立政の項に、建物は百工技芸の項に、機械工業は商賈貿易の項に説明がなされ、無月謝学校は善學述略の項に義學之会として、貧民救護所も同じ項に恤貧之会として、また懲治監も同じ項に化罪之会として説明されており、他に養老之会、撫孤之会、恤瘋之会、防惡之会、勸和之会、防後之会が挙げられている。その説明は例えば養老之会では「一養老之会、如民中有老而無「子」、及寡苦無「依者」、不「論」男婦、則立「此」会、以「養」之。」とあり、善學述略の項の最後に「如「是」諸会、以「故」我國無「甚貧者」、是即聯邦之諸善學也。」と書かれ、しめくくられている。

以上の如く、新島が『繰り返し読み、脳髓が頭からとろけ出る程驚いた。』といった書は『連邦志略』であることが判明したが、外国の侵略の危機にさらされ、江戸幕府の圧政